



TITLE:

# 地名の地理學的考察とその一例(五)

AUTHOR(S):

小林, 悟一郎

---

CITATION:

小林, 悟一郎. 地名の地理學的考察とその一例(五). 地球 1932, 18(4): 291-296

ISSUE DATE:

1932-10-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184090>

RIGHT:

三一九)に就いて年齢構成を調査した所によると二〇歳頃より四〇歳頃迄の人口が一五歳乃至二〇歳頃までの人口に比して稍々大なる觀を呈し、所謂玉葱型を示してゐる事は他の炭礦に見られると同じ現象である。たゞ北海道炭礦汽船會社礦夫一一、四八四名の年齢構成を考察するに常磐炭田に於ける礦夫の三〇歳より三五歳乃

至四〇歳に至る數の最も多いのに比し、二五歳より三〇歳までの礦夫が特に多いは如何なる原因によるであらうか。内地より移民した礦夫の比較的若く、常磐等には稍々壯年者が多く集る爲めか、青年礦夫が比較的多い當炭田が一般に機械使用、採炭能率と相關して將來の考究すべき好題であらう。(未完)

## 地名の地理學的考察とその一例 (五)

小林 悟 一郎

g、麓

之はフィールドでは三養基の村名が一個あるだけであつた。それも新らしいものであるが地形は妥當である。勝尾城(筑紫氏の砦城)及九千部山の麓である。フモトの語原に就いては九千部の條に合せて説きたいと思ふ。下と同族に屬すべき性質と思はれるが、熟語として地形詞の中に入れたのである。これに似たものに裾と

いふのがある。杵島の宮裾の如きである。下の部に説かなかつたので補説しておく。

フモトには尙地形を離れた意味、即ち府本がある。元村の義であるが、フィールドにはそれらしいものはなかつた。

h、谷—タン・ヤ・ヤツ

即ち一般にも谷の字に當る地形詞はこゝに扱はふと思ふ。凡てを合せて三十七ある。中、背

振部に三十二ある。他の六は杵島・南筑諸山麓のものである。平地には今までの一般の考への下ではこの部に屬すると思はれるものは、二個しか無かつた。そして「谷」字は大抵タニと讀む。他は例外といつていゝ位である。ヤに屋を當て

たと思はれるものに神崎の志波屋がある。志波といふのは姓氏にもあり、古いものではあるが、この志波屋は姓氏などの來たすものでないらしく、柴谷と考へて茲に加へる。其他岩屋(東岩屋(神)屋永(朝)等のヤも谷だと思つてゐる。東松浦の岩屋は石炭を出す所としてはふさはしいものであるが、屋は商業上の屋號と同一視すべきでない。神崎のも岩石ある山の相迫る城原川の谷にある。三養基の四阿屋のヤはキ一堰の誤記でないかとも思はれて里人時にアヅマイといふ。隣りに井川口といふ部落もあり、そのあたりに堰もあるのである。併し谷らしい點もあるから附記するに止める。屋永はその聚落は佐田川と黄金川との間にあるが屋は谷であると思

ふ。梁河やがと疑つたこともあるが、同郡三輪村に彌永といふのと同語だと思ふ。後者は小石原川の分流草場川に近いが、その名は今の聚落の地をのみ指したものでなく、秋月に至る谷全體に對しての觀念でなかつたか。

其他でも屋部(浮羽)矢部川・矢部郡(舊稱)八女なども如何かと思ふ。屋部・矢部などは、浮羽を的と解し矢作師の縁あるものの如く説くも、尙よく考へねばならぬ事と思ふ。ヤメとヤベとは相通する。ヤメは紀にもよく見受けられ、景行紀にはその麗はしい山にゐるといふ八女津姫により、ヤメの國といふとあり、持統紀には上陽ヤ畔などの用字が見えるから古い名である。併し八女津姫は八女之姫で地名が光であらねばならぬ。山を谷間即ちヤのマと解せられるとすればヤメは山の轉かとも思ふ。今は只谷ヤに關係ある事をのみ提説したいと思ふ。も一つはケヤ―芥屋假屋毛谷―等のヤも谷かと思はれる。糸島に芥屋といふのがあるが之はまだ明斷出來な

い。宮崎縣大分縣あたりの山奥又は濱に近い所にこのケヤといふのは多い。それで樵夫漁夫の出稼の假屋に因るものもあらうが、凡べてをさう思ふことは如何かと思ふのである。濱近くのものも、例へば彦島に假屋迫といふ地名があるが、迫に依つても想像出來る通り山裾の谷である。東松浦にも假屋といふ漁村があるが、屋を谷と取れぬことはない。豊後日向あたりのものも皆谷間である。高原臺地の觀のする所の上にはない。ケヤは木谷などとなされまいかと提説して置く。

今度はヤツである。三養基に八津といふ小部落があつた。小さい谷である。各地によくある傳説などに八並長者といふのがある。そのヤツもそれらしい。この近くには朝倉にあるが、フィールド外である。聚落はないが三養基にもある。共に山麓臺地又は山麓原に、刻まれた谷の多いところである。ヤツに八をあてハチと誤讀されるものもあることと思ふ。浮羽の藏八の入も

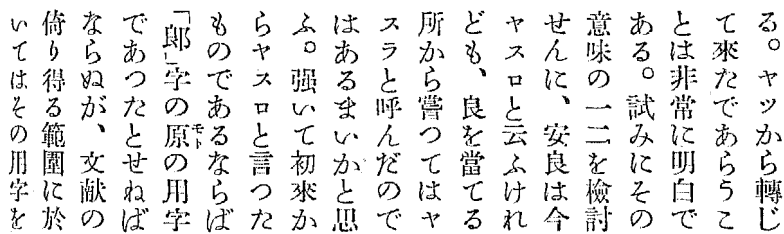
ヤツに當てたと思はれる。ヤツは起伏の極まる山奥などには少い様であつて、山麓から外野に向つて多い様である。鎌倉あたりのヤツも大なる起伏の部には入らない。

次ぎはヤツのツがスに轉じてヤスとなつたと思はれる事がある。そしてそれに「安」がよく用ひられてゐる。之一つの好字であつて、地名に於ける「安」の字義を文字に従つて解かうとする時は無理が來て、充分納得することの出來ない場合が多い。地名が起きた時、安らかの意を持たせたものは極めて少い。フィールドに於いては安良の如き殊に然りである。好字に間違ないが、ヤツかヤスカの音に當用すべき文字を探した場合牽き來たつた好字であると思ふのである。この考へは筆者の今新に提唱せんとするものの一つである。一應フィールドの「安」を舉げると左の如くである。

安良(三)恒安(小)安武・富安・自安・安本(瀨)廣安(山)富安(八)富安・安永(井)安富(澤)

之等が位置は、谷といふべき低地にある様であ

五四





處では谷地にあるからであるとしておく。

夜須村(朝)は史實に有明であるが、之も谷の意であると思ふ。そこに八並があることも、夜須がヤツに通じたものであることが分ると思ふのである。天、安、河原などのヤスもさうしたものではなかつたか。勿論ヤスは深い谷には用ひられてゐないのであつて、此の事はヤツと共通してゐて尙ヤツよりは平地に多く、殆んどみな平地に分布してゐるともいへることは、その特色である。廣かり相な安、河原とて、河原といふ語が谷に附くといふことを無理の如く思惟する方もあるべきであらうが、敍上の如き用法から

見てヤスはそれ位の餘裕ある所に却つて用ひられてゐるのである(第八圖參照)。タニはヤツ・ヤスに比べて一層せゝこましい感じがする語である。兎に角安は谷であると茲に斷言して憚らぬのである。

ヤツの轉と思はれるものに谷地(即澤の意)といふ語があるが今は略する。又ヤの轉らしいが谷をイ・キと呼びはしなかつたかと思ふものがある。之も不明地名の部で論じてみたいと思ふ。谷をコクと音讀するのは神崎の一谷あるだけである。